



Title	あたりまえにあらためて感謝
Author(s)	畠田, 博一
Citation	大阪大学低温センター 50周年記念誌. 2025, p. 23-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

あたりまえにあらためて感謝

大阪大学基礎工学研究科 夢田博一

低温センター運営委員会委員長: 2015年4月～2017年3月

20年前、大阪大学に着任するにあたり、床の振動はどうか、耐荷重はどうかなどを調べましたが、液体ヘリウムが使えるかどうかを気にした記憶がありません。水道や電気と同じように使えるものと疑わなかったのだと思います。実際、回収ラインの室内工事が必要だったもののすぐに利用できました。想定外の価格で着任時には痛かったですが、その金額で済んだのも、豊中キャンパスを作る際に、どこにどのように回収ラインを配置し、地下に埋設するかを綿密に計画されていたおかげです。

この当たり前前に利用できていることは、設立当初から今日に至るまで、安定供給にご尽力いただいているスタッフの方々のおかげであることはいうまでもありません。普段、そのことを忘れて自分が居ることも確かで、それくらい安定に供給されています。それは「ご尽力」などと簡単なことばで言い表せないように思います。供給元エリアの大規模災害、国際紛争や政治的な思惑、為替レートの変動など、自分たちではどうしようもできないことでヘリウムの供給量が極端に変化することを経験しました。それでもまだ購入できるならいいわけですが、昨今、諸外国との争奪戦による「買い負け」が顕著であると聞きます。これって・・・対応しろという方が無茶です。それでも、大阪大学の低温センターは、全国の関連機関と連絡を密にし、情報を共有しながら、安定供給の方策を常に検討、準備いただいています。それは、歴史的な背景もさることながら、大阪大学の低温センターが中核機関として他機関からも信頼され、その活動は見習いたい事例として高く評価されていることに他なりません。

液体ヘリウムのように一部の研究者しか使わない(と思われている)ユーティリティーについては、価格が高騰すると一元化構想や「受益者負担」の議論がより顕著になります。1箇所に集約してコスト削減し、使用量によって応分の負担をするという一見理にかなったルールのようにみえます。でも、これは大学としての体力を失うように思っています。ベースの金額を押し上げ、大口ユーザーよりも、小口ユーザーやこれから参入したいという人の負担を大きくします。私も30年余りの研究歴のなかで最初の10年は液体ヘリウムとは無縁でした。でもちょっとしたきっかけでヘリウムが必要となり。あの時に、使いたい時にすぐ使えなければ諦めていたと思います。新規参入者にとって、まずはちょっと試してみたい。最初は割高だし、なんか遠くから運ばないといけないので面倒だし、大口になったらもっとしんどそう・・・この世界はやっぱりやめておこうと。大口ユーザーになってしまえば、その負担は理解できるものになるのですが。着任前にヘリウムの状況を確認しないとイケないとしたら、それは人事でも少しずつ効いてきて、回り回って、大学間競争に負けるようなそんなイメージを持っています。

とりとめない文章になってしまいましたが、50周年の節目に御礼を伝え、また、寒剤および低温センターに思いをはせる機会をいただきました竹内先生ならびに編集委員会のみなさま、コアファシリティ機構低温科学支援部門のスタッフならびに運営委員のみなさまに御礼を申し上げます。